成人期のなかまたちが教えてくれること

第3回
発達は右肩上がりに進まない

滋賀大学　白石恵理子

しらいし　えりこ／1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。おもな著書に『一人ひとりが人生の主人公』『しなやかにしたたかに仲間と社会に向き合って』『保育・教育のための発達診断』（共著）（いずれも全障研出版部）『人間発達研究の創出と展開―田中昌人・田中杉恵の仕事を通して歴史をつなぐ―』（共著）群青社など多数。

よろめきながらも最初の一歩をふみだしたとき、はじめての言葉を発したとき、親や教師は大きな喜びを感じます。本人も、自分で行きたいところへ行く自由、自分の思いを伝える自由が広がることになり、「もっと行きたい」「もっと伝えたい」と新たなねがいをもつでしょう。成人期になると、幼児期や学齢期に比べて目に見える変化はゆっくりになることが多いですが、発達によって自由が広がる喜びは基本的に同じだと考えます。しかしながら、実際の発達過程はとても複雑で、決して右肩上がりに進んでいくものではありません。

自分の価値観とぶつかって…

1960年生まれの私は、高度経済成長期に幼児期・学齢期を過ごしてきました。オリンピック、新幹線、万博は、私が生まれ育った北陸の田舎町にも、〝未来は希望と明るさに満ちている〟という空気をもたらしました。実際、家の中にカラーテレビ、洗濯機、自動車などが入ってくると、日本はもっともっと「豊かに」なっていく、「豊かに」させなければならないという右肩上がりの価値観を強くもつようになったと思います。思春期に目の当たりにした「オイルショック」というか「トイレットペーパーを買うための行列」は、意識しない心の奥底に不安をもたらしたのですが、右肩上がりの価値観の間違いに気づかせるものにはなりませんでした。逆に、漠然とした不安を根底に抱えさせたことで、より右肩上がりにさせなければならないという考えに縛られていったように思います。

そんな私が大学で、発達、発達保障という考えに出会うことになるわけですが、当然、そこにも右肩上がりの価値観を持ち込んでいました。障害によって発達がゆっくりになることは容易に理解できましたし、映画『夜明け前の子どもたち』に登場する「重症心身障害児」と言われる子どもたちが、通常の場合の10倍、20倍、あるいはそれ以上の時間をかけて発達していく姿に大きな感動を覚えました。ナレーションでは〝進歩における極微の世界〟という表現がされていますが、どんなに障害が重くても、どんなに時間がかかっても、少しずつ少しずつ発達していく。そのことになんらかの形でかかわっていく仕事がしたいと思うようになり、大学院を中退して発達相談の仕事に就きました。

そこで出会った障害のある子どもたちが、少しずつでも発達していく姿をみて、その変化をお母さんと喜び合うことは何物にも代えがたいやりがいでした。発達相談の限られた時間のなかではあるのですが、ちょっとした変化も見逃さないようにしていましたし、子どもたちもまた、相談員の期待を感じてか、普段みせない「がんばり」をみせることも多かったのではないかと思います。しかし、前回の相談時には「できた」のに、今回は「できない」という姿にぶつかることも多くなりました。ときには、お母さんの不安そうな表情をみて、内心はあせりながらも、口では「できることの質や意味が変わってきたんでしょうね」などと言っていたのではないかと思います。そうした、一見「逆戻り」する姿をどう理解したらよいのか、右肩上がりの価値観に縛られていた私には大きな試練でした。

「逆戻り」の理由はさまざまにあるのですが、発達の必然性のなかでおこる「逆戻り」もあるということを、私は青年・成人期のなかまたちから学んできました。そして、それは自分の価値観を変えることにもつながっていきました。

ふとんにもぐる日々

幼いときからエネルギッシュで体力もあったケンゴさんは、他のなかまたちと同じよう